

# もっと知りたい 武者小路実篤

## 実篤の戯曲 1 かちかち山

武者小路実篤は、何かを考えると、まず場面と会話で考えたそうです。そんな実篤にとって、自分が書きたいことを一番書きやすい方法が「戯曲」でした。

ところで、「戯曲」って、何でしょう？

実篤が昔話を基に書いた戯曲「かちかち山」を見てみましょう。

「むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんがいました。」……

昔話の「かちかち山」は、こんな風にはじまります。

でも、実篤が書いた「かちかち山」は、書き方がちよつ

とちがいます。

（婆さんは爺さんの帰つて来るのを働  
きながら待つてゐる。其処に近処の兎  
がたづねてくる。）

兎。 お婆さん、お婆さん。

婆。 誰かと思つたら、兎さんか、よ

く来てくれた。暫らく顔を見せ

なかつたね。

兎。 一寸病氣をしてゐましたので、

婆。 それはいけないね、お爺さんも

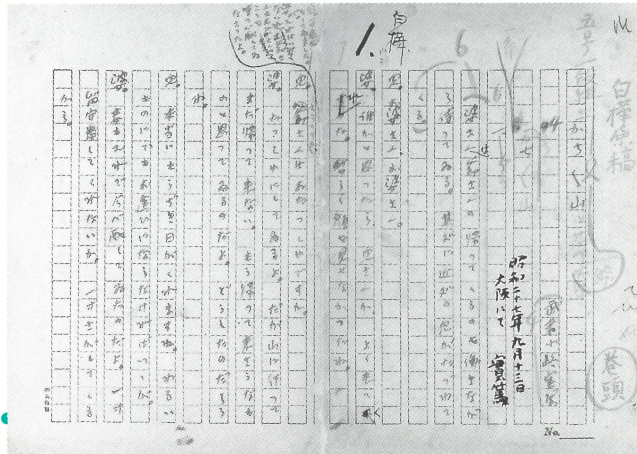
お前さんのことを時々心配して

ゐなかつたよ。



### 知ってる？

まるで劇の台本のように、場面の説明と登場人物の話し言葉を「戯曲」といいます。場面の説明を「ト書き」、登場人物の話し言葉を「セリ詞」といいます。

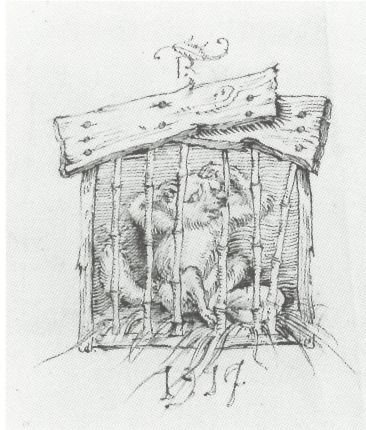


「かちかち山」原稿 「白樺」大正6年7月号発表

「かちかち山」挿絵 岸田劉生 1917年  
 (左)お婆さんが殺されて悲しむお爺さんと兎



(右)悪さばかりする狸



## ポイント

作家は、文学作品に自分の意見を盛り込みます。だから、もとはおとぎ話でも、実篤が書くと、「かちかち山」の登場人物は実篤の言葉で話し始めます。  
 例えば、兎と狸の会話では、人を信じて正直に生きることのすがすがしさを語っています。

(※狸はお婆さんをだまして殺したことを、ウソをつけて言い逃れをする。兎は狸を懲らしめるために、話を信じるふりをして、油断させる。)

狸。 あのお婆はお前さんさへ食ひたがつて

ゐたよ。——(中略)——

兎。 そうかね。そんなにおそろしい婆さ

んだつたかね。それならつまり、君は僕の命の恩人だと云つてもいいだね。——(中略)——

狸。 何しろ人は見かけによらないとはよく云つたものだよ。俺なんか、誰の

云ふことも信用しない。油断はしない。だからだまされることはない。

兎。 さうかね。僕はすっかりだまされて

ゐたよ。

狸。 それは君は正直ものだからさ。

兎。 そのかはり僕は夜はよくねむれるし、かうやつてゐても気がおちついてゐられるよ。君は夜もろくにねむれないだらう。

狸。 それはさうさ。

友達と、それぞれの役になつたつもりで、声を出して読んでみよう！

あのお婆はお前さんさえ……



そうかね。そんな……



今度は、役を交代して読んでみよう。  
 読む人がかわると、せりふの感じががうよ。